

農作物生産情報

(令和7年5月)

気 象

(令和7年4月24日 仙台管区气象台発表 東北地方1か月予報より)

向こう1か月の予報は、天気は数日の周期で変わるが、平年に比べ晴れの日が少なく、平均気温は高い確率50%である。

水 稲

健苗育成と適正施肥で、良食味・高品質米を生産しよう！

1 育 苗

(1) 温度管理

5月は気温が高くなり、ハウス・トンネル内の温度も上昇するため、積極的な換気に努める。

降霜や低温が予想される場合は、被覆資材やストーブなどで保温する。

■温度管理の目安

葉 数	温 度
出芽揃～1.5葉	日中30℃以下、夜間5℃以上
1.5葉～3.0葉	日中25℃以下、夜間5℃以上
3.0葉～3.5葉 (田植え)	日中20℃以下、夜間5℃以上 田植え5日前頃には、霜注意報発令時や強風の時以外は、できるだけ夜間も外気に慣らし、丈夫な苗に仕上げる

(2) 水管理

かん水するタイミングは、床土が乾き、苗の葉が巻き始めた頃で、午前中に箱底まで届くようにたっぷりかける。

機械的に毎日かん水すると、草丈が伸びる割には葉齢の進まない軟弱苗となり、田植え後の活着や初期生育が劣る。育苗中はできるだけ節水し、硬い苗に育てる。

(3) 追 肥

田植え前に苗の葉色が淡くなった場合は、1箱当たり硫安5g(窒素成分で1g)を水500mlに溶かして追肥する。追肥後は、肥料ヤケを起こさないよう葉が乾く前にかん水して肥料分を洗い流す。

2 本 田

(1) 畦畔の補強

畦畔にネズミ穴などがあると水持ちが悪くなり、除草剤の効果が低下したり、低温時に深水管理を行っても保温効果が小さいので早めに補強する。

(2) 施 肥

窒素量が多すぎると、食味・品質の低下や倒伏、いもち病等の原因となるので地帯別、品種別施肥基準を遵守する。

ア 「まっしぐら」「はれわたり」

■10 a あたり施肥窒素量の目安（堆肥 1 t/10 a 施用の場合）

土壌の種類	総窒素量	施肥体系及び施肥量
湿田 (水はけ悪い)	6～8 k g	・表層 1 回追肥体系の場合、基肥を総量の 7～8 割とし、追肥を総量の 2～3 割とする ・表層 2 回追肥体系の場合、基肥を総量の 6 割とし、追肥を 1・2 回目とも 2 割とする
半湿田 (水はけやや悪い)	8～9 k g	
乾田 (水はけ良い)	9～10 k g	
砂壤土 (水持ち悪い)	10～11 k g	

イ 「青天の霹靂」

■10 a あたり施肥窒素量の目安

土壌の種類	総窒素量	基肥量	追肥量
半湿田	7 k g	6 k g	1 k g 以内
乾田	8 k g	6 k g	2 k g 以内
備 考	・施肥体系は表層 1 回追肥体系を原則とする ・基肥量は地力に合わせて調整し、追肥は栄養診断に基づいて行う ・転作後の復元初年度目の水田は施肥による生育コントロールが困難なので、作付けしない		

(3) 代かき

代かきは、田面に高低差が生じないように行う。

生わらすき込み田や田畑輪換田等の作物残渣がある水田では、残渣を土中にすき込むため、浅水で代かきを行う。

<被覆肥料の被膜殻の流出防止について>

プラスチックを利用した被覆肥料は、肥料成分が溶出した後の被膜殻が水面に浮上し、河川等に流出する可能性があります。

プラスチックを利用した被覆肥料を前年に施用しているほ場では、浅水代かきを行うほか、代かきや田植え前の強制落水は避けるなどの水管理を行うことにより、被膜殻をほ場外に流出させないように注意しましょう。

(4) 田植え

日平均気温が 13℃以上になるときを目安とする（五所川原アメダスの平年値では 5 月 10 日以降）。代枯れ防止と活着促進のため、強風の日を避け、温暖な日を選ぶ。

「青天の霹靂」の栽植株数は 70 株/坪程度とし、直播栽培・疎植栽培は行わない。

(5) 田植え後の水管理

田植え後は直ちに水を入れ、初期生育促進のため、低温時は苗が冠水しない程度の深水管理、高温時は浅水管理とする。

昼間止水・夜間かんがいを基本とし、掛け流しはせず、水温を上げるようにする。

■水管理の目安

生育期	暖かい日の水深	寒い日の水深
分けつ期	3 cm程度の浅水	5～6 cm程度の深水

(6) 除草剤の使用方法

除草剤は、前年発生した雑草を考慮して選び、使用基準を守る。なお、除草剤を適正に使用しても特定の草（アゼナ、ホタルイ等）が大量に残る水田では、抵抗性雑草が発生している可能性があるため、これらに効果のある除草剤を選択する。

初期＋中期の体系処理の場合は、中期剤の処理が遅れないように適期に散布する。

河川等の水質を保全するため、**散布後7日間**は絶対に落水・掛け流しをしない。

(7) 病虫害防除

ア 箱施用剤使用の留意点

いもち病や初期害虫等を予防する箱施用剤は、薬剤毎に使用時期や方法が異なるので、農薬の登録内容等を確認して適正に使用する。

イ イネミズゾウムシ

移植前や移植時に防除をしなかった場合は、発生に応じて防除する。

発生が多い場合には6月上旬頃に水面施用剤を散布する。水面施用剤は止水期間を7日間とし、落水及び掛け流しは行わない。また、この時期の防除によりイネドロオウムシも防除できる。

ウ 葉いもち

補植用苗をほ場に放置したままにしておくと「葉いもち」の発生源となるので、補植が終わったら直ちに処分する。

(8) 農薬の適正使用

育苗跡地で野菜等を栽培する場合は、育苗箱用の農薬処理を育苗ハウス外で行うか、ハウス内で行う場合はビニールシートなどの無孔シートを使用するなど、農薬が土壌に浸透しないように対策する。

大豆の適正は種、小麦の適期の追肥で生育量を確保しよう！

◆大 豆◆

1 ほ場準備

転作田では排水対策として、ほ場周囲に明きよを掘り、排水路へつなぐ。地下水位が高い場合は、簡易暗きよの設置や、心土破碎を行う。

水稻作から大豆作に切り替える時は苦土石灰などを施用し、pH6.0～6.5 を目標に土壤酸度を矯正する。

水分が高い状態での事前耕起は、ほ場の物理性を悪化させるので、乾燥した状態で作業し、回数も最小限に抑える。ほ場の碎土が不十分だと、は種精度が低下して出芽むらが生じたり、土壤処理除草剤の効果が劣る原因となるので、耕うんを丁寧に行う。

2 は種・栽植密度

は種適期は5月中旬～下旬、は種量は7～8kg/10aを目安とする。5月は種の作型では畦幅を70cm前後とし、10a当たり栽植本数が20,000本程度となるよう、株間やは種粒数を調節する。

は種直後の多雨は、出芽率の低下や初期生育の不良を招くので、気象条件に注意しながら作業する。

湿害を受けやすいほ場では、うね立ては種等で被害を軽減する。

3 施肥量

基肥は、窒素成分量で2～3kg/10aを基準とし、土壤条件、連作等を考慮し増減する。

4 種子消毒とわい化病の予防

必要に応じて、下記の剤で塗沫処理を行う。

剤 名	鳥害防止	紫 斑 病	アブラムシ類（わい化病）
キヒゲンR-2フロアブル	○	○	×
クルーザーFS30	×	×	○
クルーザーMAXX	○	○	○

○：効果あり ×：効果なし

注) クルーザーFS30 は鳥害防止効果がないので、鳥害が予想される場合は事後にキヒゲンR-2フロアブルの塗沫処理を行うこと。

5 根粒菌の接種

大豆栽培初年目のほ場は、根粒菌の着生が悪く生育に影響するので、種子消毒後に市販の根粒菌を粉衣する。

6 雑草対策

は種後、速やかに土壤処理除草剤を散布する。

◆小 麦◆

1 生 育

ネバリゴシ及びキタカミコムギの県生育観測ほの根雪期間は平年より 25 日以上長く、特に、キタカミコムギほ場では消雪が 3 月 22 日と平年に比べ 16 日遅く、積雪量が多かったことから、部分的に雪腐病の発生が見られた。

生育状況は、ネバリゴシ、キタカミコムギとも茎数が平年を下回った。幼穂形成期は、ネバリゴシが 3 月 25 日で平年に比べ 2 日遅く、キタカミコムギが 4 月 1 日で平年に比べ 6 日遅かった。

■生育状況（県生育観測ほ 4 月 10 日現在）

品種 (地点名)	年次	は種日 (月日)	幼穂形成期 (月日)	草丈 (c m)	茎数 (本/㎡)
ネバリゴシ (つがる市木造出来島)	本年	9/25	3/25	17.3	879
	(比・差)	(2 日遅)	(2 日遅)	(85%)	(95%)
	平年	9/23	3/23	20.3	930
	前年	10/3	3/25	24.6	1,881
キタカミコムギ (つがる市木造吹原)	本年	9/15	4/1	30.0	771
	(比・差)	(2 日早)	(6 日遅)	(130%)	(89%)
	平年	9/17	3/26	23.1	870
	前年	9/18	3/25	26.9	1,133

2 追 肥

2 回目の追肥時期は、一穂粒数の確保やタンパク質含有率向上に有効な「止葉抽出期」から「出穂期」頃で、例年 5 月上旬から下旬頃が実施時期となる。

なお、追肥量は、窒素成分で 2 kg/10 a を基準とし、生育に合わせて増減する。

■追肥時期の目安

追肥時期	判 断 の 目 安
止葉抽出期	止め葉が全体の 4～5 割開いた時期
出 穂 期	ほ場全体の茎の 40%～50%が出穂した時期

3 排水対策

転換畑では出穂期以降の湿害を防止するため、明きょや排水溝の補修点検を行う。

4 病害虫防除

(1) 赤かび病

開花期から乳熟期にかけて、気温が高く湿潤な天気が続くと発生が多くなるため、開花始めから開花期に 1 回目、その 7 日後に 2 回目の防除を行う。

感染すると収量や品質が低下するばかりでなく、人畜に有害なかび毒（デオキシニバレノール等）を生産し、この基準値を超えるものは流通できなくなる。

(2) うどんこ病

茎数が多く、草丈が伸びているほ場で発生しやすい。止葉直下葉での発生直後に薬剤を散布すると効果的である。

なお、アミスター 20 フロアブルは、うどんこ病に登録があるが、出穂後に使用すると赤かび病のカビ毒汚染低減効果が劣る事例があるため使用しない。

りんご

平年より生育が早まっているため、霜害防止対策をきちんと行おう！
黒星病の重点防除時期なので、薬剤の散布間隔は10日以内を遵守しよう！
結実状況に合わせた摘果を行い、早期適正着果に努めよう！

県生育観測ほ（板柳町五幾形）のふじの発芽日は4月7日（平年4月8日）で平年より1日早く、展葉日は4月16日（平年4月18日）で平年より2日早かった。

1 霜害防止対策

開花期間が低温に最も弱く、落花期までは -1.5°C ～ -1.7°C の低温に約60分遭遇すると被害が出始める。

降霜は、晴天無風で午後7時の気温が 6°C 以下の日の翌日早朝に発生する可能性が高い。今年も生育が早まっており、霜害を受けるリスクが高くなっているため、霜害防止対策を確実に実施する。

(1) 燃焼法

霜注意報が出たら、自園の気温の動きを観察し、 0°C になったら燃焼資材に点火する。

■燃焼資材

種 類	利 用 方 法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要

2 " 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要

3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

(2) 送風法（防霜ファン）

防霜ファンを設置している園地では、ファンの始動温度を 2°C に設定しておく。

寒気を伴ったときや著しく低温になったときは、防止効果が低いので燃焼法を併用する。

幼果期に被害を受けた年もあったことから、結実後でもファンのスイッチは切らない。

2 摘花・摘果

良品安定生産のためには早期適正着果が重要であるので、開花量が十分にある場合は摘花を積極的に実施する。開花量が少ない場合、または降霜常襲地帯や開花期が天候不順で結実に不安がある場合は、えき芽花の摘み取りにとどめる。

(1) 摘 花

弱い花そうやえき芽花等の不要な花そうは、全花摘み取る。

(2) 摘 果

ア 人手による摘果

摘果は早いほど良いが、実止まりが判別できない時期（落花10日～15日後頃まで）にはまず一つ成り摘果を行う。

ただし、つがる、デリシャス系など年により早期落果の多い品種は、落花10日後頃までに一つ成り摘果を終える。

仕上げ摘果は、陸奥では落花15日後頃までに、他の品種は落花25日後頃までに終える。

着果量が不足気味の場合は、標準的な着果程度になるように、さびや変形の程度が軽

い果実を残す。

イ 薬剤による摘果

十分に着果している場合は、ふじ、王林、陸奥、北斗、シナノスイート、さんさ、早生ふじ、トキを対象に各品種の満開後2週間頃（ふじでは横径が10mm位の時）、紅玉は満開後3週間頃（横径が16mm位の時）にミクロデナボン水和剤85（1,200倍、展着剤加用）を、果実に十分かかるよう10a当たり350～500リットル散布する。

■標準的な着果程度

品 種	摘果の強さ (残す果実)	着果率 (%)
紅 玉	3頂芽に1果	33
つがる・ジョナゴールド	3.5頂芽に1果	29
ふじ・王林・さんさ・きおう・トキ・早生ふじ・未希ライフ・千雪・シナノスイート・シナノゴールド・ぐんま名月	4頂芽に1果	25
北 斗	4.5頂芽に1果	22
陸 奥・世界一	5頂芽に1果	20

3 病害虫防除

(1) 黒 星 病

「ふじの落花20日後頃」までが最も重要な時期なので、**10日以内の間隔で散布**する。散布予定日に降雨が予想される場合は、前日に散布する。低温、多雨等で開花期間が長引いた場合には、満開を過ぎたら花が残っていても「落花直後」の散布を行う。

(2) 腐らん病

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。

胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

ア 泥巻きを行う場合は、病患部を削り取り、周辺健全部を含めて病患部に5cm程度厚く泥を張り付け、肥料袋などを被せる。貼り付けた泥が過乾燥・過湿にならないよう、数カ所穴を空ける。

イ バッチレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部（上下4～5cm、左右2～3cm）を含めて病患部を紡錘形に削ってから、薬液をすみずみまで塗る。

ウ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下4～5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。

エ 胴腐らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

(3) ミダレカクモンハマキ

発生の多い園地では、「開花直前」及び「落花直後」にロムダンフロアブル、アタブロンSC、ファイブスター顆粒水和剤、バイオマックスDFのいずれかを選択し、同一薬剤を連続して散布する。

(4) リンゴコカクモンハマキ

越冬世代幼虫が多い園地では「落花直後」にアタブロンSCを散布する。

(5) クワコナカイガラムシ

発生が多い園地では、薬剤による防除だけでなく、バンド巻きなどの耕種的防除にも取り組む。

(6) 交信攪乱剤の設置

モモシクイガやリンゴコカクモンハマキは通常の殺虫剤だけでは防除が困難なため、コンフューザーRを5月中旬に設置する。

広い面積で処理するほど効果が高まり、交尾済みの雌成虫の飛び込みによる被害リスクが小さくなるので、地域ぐるみで取り組み、発生密度の低下を図る。

交信攪乱剤「コンフューザーR」

薬剤名	使用量	適用病害虫
コンフューザーR	100 本/10a	モモシクイガ、ナシヒメシクイ、リンゴコカクモンハマキ、ミダレカクモンハマキ、リンゴモンハマキ

性フェロモン濃度のむらがない状態にするため、まとめて1か所に取り付けることはしない。

園地面積から必要な本数を計算し、その8割程度を園地全体に均一に取り付ける。残りの2割程度を性フェロモン濃度が低下しやすい園地の周辺部や傾斜がある場合には傾斜の上部に取り付ける。（性フェロモンは空気より重く、傾斜の下方向にたまりやすくなるため）

栽植距離別の1樹当たりコンフューザーRの設置本数

栽植距離	10a 当たり 栽植樹数	1 樹に設置する コンフューザーRの本数
8 × 8 m（普通樹）	16 樹	6.25 本（1 樹に6 本設置）
4 × 2 m（わい化）	125 樹	0.8 本（5 樹に4 本設置）
3.5 × 1 m（高密植）	286 樹	0.35 本（3 樹に1 本設置）

コンフューザーRの具体的な設置方法については、農ナビ青森に掲載している。
(<https://www.nounavi-aomori.jp/farmer/archives/8495>)



■薬剤散布【農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

回	散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
第 2 回	ふじの開花直前 (5月3～4日頃)	SDHI剤 ネクスターフロアブル 1,500倍 フルーツセイバー 2,000倍 ロンセラーフロアブル 3,000倍 パレード15フロアブル 2,000倍 カナメフロアブル 4,000倍	320
第 3 回	ふじの落花直後 (5月13～14日頃)	ミギワ20フロアブル 4,000倍 ＋ デランフロアブル 1,500倍 又はチウラム剤 500倍 チオノックフロアブル トレノックスフロアブル 又はマンゼブ剤 600倍 ジマンダイセン水和剤 ペンコゼブ水和剤	350
	5月中旬	コンフューザーRの設置 (100本/10a)	
第 4 回	ふじの落花10日後頃 (5月23～24日頃)	炭酸カルシウム水和剤 100倍 ユニックス顆粒水和剤47 2,000倍 ＋ チウラム剤 500倍 又はマンゼブ剤 600倍	350
第 5 回	ふじの落花20日後頃 (6月2～3日頃)	炭酸カルシウム水和剤 100倍 デランフロアブル 1,500倍 又はチウラム剤 500倍 又はマンゼブ剤 600倍	420

※1 散布月日は目安であり、天候や生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する。

霜害防止対策の徹底と適期作業、適正防除で良品生産を目指そう！

県生育観測ほ（鶴田町境）のスチューベンの催芽日は4月17日（平年4月15日）で平年より2日遅かった。

1 霜害防止対策

りんご同様、霜注意報が出されたら、霜害防止対策を確実に実施する。

2 摘芽・摘梢

養分の競合を防ぎ、日当たりや通風を良くするため、できるだけ早く実施する。

不定芽から伸びたもののうち、予備枝として利用できるもの以外は摘除する。

晩霜害の恐れがある園地では、晩霜の心配がなくなってから最終新梢数とする。

スチューベンの樹勢が強い場合は花振るい防止のため、やや多めに残し、結実の状態をみてから、最終新梢数とする。最終新梢数は主枝1m当たり8～10本とする。

シャインマスカットでは、樹勢を調節するために、展葉2～3枚以降から1回目の摘心時までに3回程度に分けて実施する。最終新梢数は主枝1m当たり空枝2本を含めて12本とする。

3 病虫害防除

(1) ツマグロアオカスミカメ

発生の多い園地では、展葉直前にモスピラン顆粒水溶剤2,000倍を散布する。

(2) 灰色かび病

新梢伸長期に多発生が懸念される場合は、ポリオキシシナリ水和剤、チウラム剤（チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル）又はDMI剤（インダーフロアブル又はオンリーワンフロアブル）を散布し、新梢での被害を防止する。

(3) ベと病

発生が多い園地では、スチューベンでは新梢伸長期（約20cm）にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤、開花10日前（6月上旬）にアリエッティC水和剤、キノンドー水和剤40、チウラム剤のいずれか、シャインマスカットでは新梢伸長期（約15cm及び約30cm）にジマンダイセン水和剤又はチウラム剤を散布する。

また、発病葉や発病果房は見つけ次第、摘み取って処分する。

■薬剤散布 【農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。】

灰色かび病、黒とう病、べと病の重点防除時期なので、昨年の病害発生状況と今年の天候に応じて防除薬剤を選択する。なお、水稻育苗ハウス内にシャインマスカットが栽培されている場合、農薬散布、摘芽・摘梢等各種管理作業は、育苗箱搬出後に行う。

<スチューベン>

散布時	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
新梢伸長期 <約20cm>	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	200
	又はポリオキシシンAL水和剤 500倍	
	又はチウラム剤 1,000倍	
	又はインダーフロアブル 8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	
	パダンSG水溶剤 1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤 2,000倍	
開花10日前	又はアディオンフロアブル 1,500倍	250
	アリエッティC水和剤 800倍	
	又はキノンドー水和剤40 600倍	
	又はチウラム剤 1,000倍	
	又はインダーフロアブル 8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	
	ベストガード水溶剤 1,000倍	
	又はパダンSG水溶剤 1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤 2,000倍	
	又はアディオンフロアブル 1,500倍	

<シャインマスカット（露地栽培）>

散布時	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
新梢伸長期 <約15cm>	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	200
	又はポリオキシシンAL水和剤 500倍	
	又はチウラム剤 1,000倍	
	又はインダーフロアブル 8,000倍	
	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	
	パダンSG水溶剤 1,500倍	
	又はアグロスリン水和剤 2,000倍	
新梢伸長期 <約30cm>	又はアディオンフロアブル 1,500倍	250
	ジマンダイセン水和剤 1,000倍	
	又はポリオキシシンAL水和剤 500倍	
	又はチウラム剤 1,000倍	
	又はインダーフロアブル 8,000倍	
開花10日前	又はオンリーワンフロアブル 2,000倍	250
	アリエッティC水和剤 800倍	
	又はキノンドー水和剤40 600倍	
	ベストガード水溶剤 1,000倍	
	又はパダンSG水溶剤 1,500倍	
	又はジノテフラン剤 2,000倍	

野 菜

霜の恐れがある場合は、被覆等により霜害防止に努めよう！
寒暖の差が大きい時期なので、こまめな温度管理を心がけよう！

◆トマト◆

1 定植後の管理

(1) 手かん水

定植後、5～6日経過しても葉露が発生しない場合は、株元に手かん水（1株 500cc 程度）を行う。葉色が淡い場合はかん水を兼ねて液肥を株元に施用する。

■追肥肥料例（葉色が淡い場合）

(2, 100 株/10a)

肥料名	倍数	1 株当たり	必要量/10a	回 数
OK-F-1	700倍	300cc	水600リットル：肥料857g	3～4 日おき

2 段花房開花までは手かん水で生育を揃えるが、根張りを良くするため、かん水は控えめに行う。

※「りんか 409」は萎れやすいので、定植後は、他の品種よりこまめに観察し、萎れの予兆が見えたら、速やかに換気、手かん水、葉水などを行う。

(2) わき芽かき

わき芽は、傷口を早めに乾かすため、できるだけ晴天の日に行う。

(3) トマトトーン処理

1～4 段花房は、第 4 花開花始めにトマトトーンを処理する。

2 かん水・追肥

試しかん水は、1 本仕立て苗は 2 段花房トマトトーン処理後に 1 株 1 リットル、2 本仕立て苗は 1 段花房開花最盛期に、1 株 2 リットル（1 枝当たり 1 リットル）を目安に行う。

本格的なかん水・追肥は、1 本仕立て苗は 3 段花房トマトトーン処理後から、2 本仕立て苗は 2 段開花最盛期から行う。1 回当たりの追肥量は窒素成分で約 0.5kg/10a 以内とする。追肥による根焼けを防止するため各液肥の基準希釈倍数は遵守する。

3 温度管理

ハウス内の温度は昼間 25℃前後で管理する。最低気温は 15℃以上を目標とし、夜間冷え込むことが予想される場合は、被覆資材や暖房器具等を設置し気温の低下防止に努める。

4 病虫害防除

前年にトマトキバガが発生し、かつ冬期間ビニールをかけっぱなしのハウスでは、トマトキバガの発生に注意し、早期に防除を行う。

◆メロン◆

1 本畑の準備

定植の2週間前に堆肥・土壌改良資材・基肥を施用し、耕起・整地する。

定植7～10日前に畦立て・マルチングを行い、地温（深さ15cmで18℃以上）及び土壌水分を確保しておく。この時、畦とマルチの隙間を少なくし、密着させると雑草抑制に効果的である。

2 定植時の留意点

定植時には、活着水として、ぬるま湯をポットにかん水する。

また、活着水に液肥等を入れると発根促進に効果的である。

定植は、温暖な日を選び、夕方までに作業を終えられるようにする。

根鉢を崩さないようにポットから取り出し、深植えにならないように根鉢の上部がマルチ面よりやや高くなるように植え、株元には土を寄せない。

3 定植後の管理

(1) 整 枝

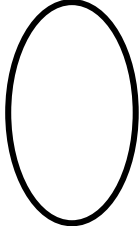
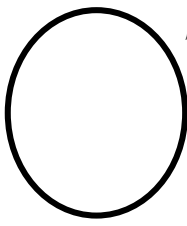
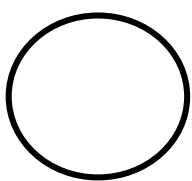
活着後、子づるの伸長を確認したら、生育が揃った子づるを2本残す。この際、株元の葉や孫づるなど不要な側枝は除去し、整枝作業終了後に薬剤散布する。

(2) 温度管理等

最高気温28～30℃、最低気温12～15℃を目安に、トンネルの開閉、保温資材（保温キャップ等）の活用でこまめな温度・湿度管理を行う。トンネルの換気は苗の反対側のみ裾上げする。

最上位葉展開時には、その6～7節上の花芽が既に分化を開始していることから、子づるの5葉展開時から開花・結実までの管理が、特に良品生産に重要である。

■花芽発育時の条件と果形との関係（タカミ）

【高温・多湿】 草勢が強い	【適温・適湿】 適正な草勢	【低温・乾燥】 草勢が弱い
 腰高が際立ち ラグビーボール状 デベツ果の 発生も多い。	 腰高で、ボリューム 感あるタカミ 本来の形状	 タカミ本来の腰高 形状が見られ ず、円形に 近く、小玉

花 き

土壌診断に基づくバランスの良い施肥設計で、高品質花きの生産を目指そう！

◆キ ク◆

1 育苗管理及び定植

8月出荷・無摘心栽培、9月出荷・摘心栽培は、5月が定植適期となるため、定植2週間前に挿し芽作業を行う。育苗期間は15～20日を目安とし、根長が1～2cmになったら定植する。特に小さめのセルトレイで育苗した場合は、苗が老化しないよう注意する。

施肥は全量で窒素成分10～20kg/10aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。施肥前に土壌診断を行い、それに合わせて施肥量を調整する。追肥は、葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

温度変化が激しい時期なので、低温時には保温を行うなど、こまめな温度管理に努める。

2 病虫害防除

白さび病は、温度20℃前後の多湿状態で発病しやすいため、施設内の換気に努め、親株管理の段階から薬剤散布するなど予防を心がける。また、ハモグリバエ類、アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

◆トルコギキョウ◆

1 定植後の管理

昼温25℃以下、夜温15℃を目標に、こまめなハウスの開閉や遮光により適正な温度管理に努める。

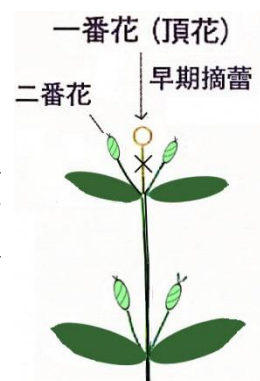
定植後は、活着するまで乾燥しないようこまめにかん水し、生育初期に十分な発根を促す。草丈15～20cm以降は徐々にかん水の間隔をあげ、根が深くまで張るよう心がける。

追肥は、生育を見ながら出らい前までに液肥で3～5回施用する。

2 枝整理と摘蕾

地際から20cmくらいまでの側枝は早めに摘み取り、主茎の生長を促す。その際、付け根から除去しないと、再び側枝が発生するので注意する。また、1番花は手で摘み取れる大きさになったら早めに除去し、その後に出荷時の開花のそろいを考慮して、不要な枝と蕾を整理する。

枝整理作業は湿度が低い日に行い、作業終了後は病気を防ぐために殺菌剤を散布する。



3 病虫害防除

灰色カビ病や斑点病は多湿状態で発生しやすいため、日中は施設内の換気に努め、登録のある薬剤を薬剤散布するなど予防を心がける。アザミウマ類、アブラムシ類等の発生に注意し、早期発見・早期防除に努める。

《春の農作業安全運動実施中 4月1日～5月31日》

- ①慣れた作業でも油断せず、安全を確認して、作業しましょう。
- ②必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
- ③自分は「大丈夫」と過信せず、無理のない作業を行いましょう。

《山火事防止運動強調期間実施中 4月1日～6月10日》

春は空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期です。剪定した枝等をやむを得ず園地で焼却する場合、山火事など火災の発生防止を徹底してください。

《6～8月は「農薬危害防止運動」実施期間です》

農薬の適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう

- ①使用し残った農薬などは、河川等へ絶対捨てないでください。
- ②農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認してください

《モモシンクイガ等防除のため、交信攪乱剤の積極的な利用を！》

青森県りんご病害虫防除暦の基準薬剤に交信攪乱剤（コンフューザーR）が採用されました。

- ①リンゴコカクモンハマキにおいて殺虫剤の効果が低下していること
 - ②農薬の再評価制度に伴い、使用可能な殺虫剤が減少しつつあること
 - ③高温下では害虫の発育スピードが速まるため、薬剤防除を主体とした防除ではシンクイムシ類の被害抑制が困難であること
- などの理由により、防除体系が変更となります。ハマキムシ類やシンクイムシ類など複数の害虫への効果が期待できますので、積極的に自園地へ交信攪乱剤（コンフューザーR）を導入してください。

《りんご属及びなし属植物の中国産花粉を使用しないで！》

中国において、火傷病の発生が確認されたため、中国産なし、りんごの花粉等の輸入が停止されました。

既に輸入された中国産花粉を介して火傷病がまん延することがないように、生産年にかかわらず、中国産花粉や来歴不明の花粉を入手・使用することがないようにお願いします。